

# 夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授  
**瀧井 敬子**

(第24回・最終回)

漱石が、あと7年長生きしていたなら！

『漱石全集』第25巻(1996年・岩波書店発行)には、「文士の生活」という短文が所収されている。私生活に関して、かなり不躰な質問をされた漱石が、それに対して答えた談話である。大正3年3月22日付の『大阪朝日新聞』の付録ページに掲載された。娯楽について訊かれた漱石は、「音楽は面白いとは思わない」と答えている。

私はびっくりした。確かに漱石がコンサートに行くようになったきっかけは、弟子の寺田寅彦から誘われて、しぶしぶだったかもしれない。だが、イギリス留学以後は、西洋音楽にかなりの好奇心を抱いていたことは間違いない。しかも、寅彦を指南役にして何度かコンサート体験したあとは、漱石の方から寅彦に、チケットを買ってほしい、と手紙で頼んでいる。音楽は面白くないと思っている人が、そんなことをするであろうか。

それだけではない。寅彦が欧米留学で日本を留守にしていた間には、漱石は長女筆子のためにピアノを買い、習わせている。その上子供たちの教育について訊かれた談話では「音楽は、特に稽古させてある」(「私のお正月」)と答えている。そして、寅彦が留学から帰国すると、彼の父親まで招待して、三人で東京音楽学校の定期演奏会に行ったのである。さらには弟子の小宮豊隆をコンサート行きの仲間にしてしまったのである。

しかし、「文士の生活」の音楽云々の談話には

続きがあった。

「…西洋音楽のいゝのを聞いたら如何か知らぬが、私は今までさう云ふ西洋音楽を聞いたことのない為か、未だ一度も良い書画を見る位の心待ちさへ起こした事は無い。」

漱石のこの答えは正鵠を射ている。大正3年の日本は、未だ西洋音楽の草創期であった。外来演奏家にしても、大家は来日していない。コンサート体験を積み、耳が肥えてきていた漱石には、自分はまだ本物を聴いていないという意識が芽生えていたものと思われる。

音楽史に不朽の名を残す名匠が来日したのは、漱石が大正5年(1916)に49才で他界して、7年後の大正12年であった。2人のヴァイオリニストがやってきた。5月にフリッツ・クライスラー、11月にヤッシャ・ハイフェッツ。

寺田寅彦は小宮豊隆に手紙を出した。「一夕奮発して聞きに行かうと思つて居ます」(大正12年4月26日付)。クライスラーの一晚の演奏料は家が一軒建つほどであったという。9月1日に関東大震災があって、帝国劇場が焼失。11月のハイフェッツのリサイタルは帝国ホテルで行われた。寅彦は小宮に、また手紙を出した。大震災以後、自分は楽器を弾くことも、音楽を聴くことも自粛していたが、「ハイフェッツで皮切りをしやうかと思つて居る。好笑」(大正12年11月3日付)、と。